研究課題　今日から明日へつながる保育　～新聞ごっこを通して～

東京学芸大学附属幼稚園（小金井園舎）　吉川　和希

1　はじめに

本園では、遊びを中心とした保育実践の中で、幼児の協同性を重視した保育について追及してきた。協同性は、３歳児からの園生活の積み重ねの姿としてとらえているが、その集大成として、年長児になって協同する活動が可能になってくると考えている。また、こだわりの強い幼児が個の課題を追求する中にも、周囲の幼児と協同的な関係が育っていることについても考えてきた。

そこで今回は、平成２３年度の３学期、５歳児学年ほしぐみで２ヶ月近く続いた新聞ごっこの遊びを取り上げる。それぞれの幼児のこだわりが表れた新聞ごっこにおいて、T児を中心に、２つの視点で振り返る。１つ目は、幼児の体験と表現について、２つ目は、人とのかかわりの中で見られた協同性の育ちについて、である。

2　新聞ごっこの事例　―T児の新聞作りを中心に―

（1）新聞作りのきっかけ　事例１

平成２３年度の冬休み前、５歳児学年の教師は、子ども達が冬休み中に様々な遊びに取り組み、充実した時間を過ごせるように『こどもしんぶん』を発行した（写真１）。Ａ４サイズの新聞で、遊びのことや家庭での過ごし方についての新聞だった。３学期が始まると、Ａ児が画用紙でその形式を真似て、自分なりの『こどもしんぶん』を作って遊んでいた（写真２）。

その数日後、T 児は登園してくるなり、「大変だー！！あー大変だ！！東京タワー曲がっちゃった！！」と叫び、「ぼくも新聞を作る。」と言って新聞『あさひしんぶん』を作った（写真３）。A 児に刺激を受けたことと、東京タワーが曲がったという世の中の情報を受けて「大変だ！！」と思ったことで、新聞を作ることにしたようだった。教師は、T 児が周囲の幼児に東京タワーの大変さについて、情報を知らせたい様子だったので、T 児が作った新聞を数枚コピーした。するとT 児は、急いで周囲の友達や教職員に新聞を配っていた。

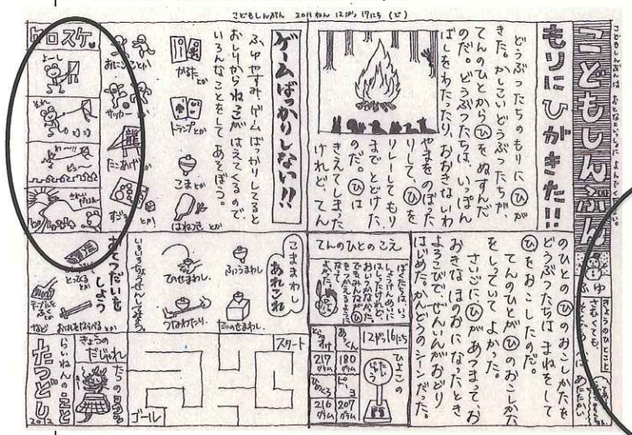


写真１　【教師が作った新聞（12／17）】

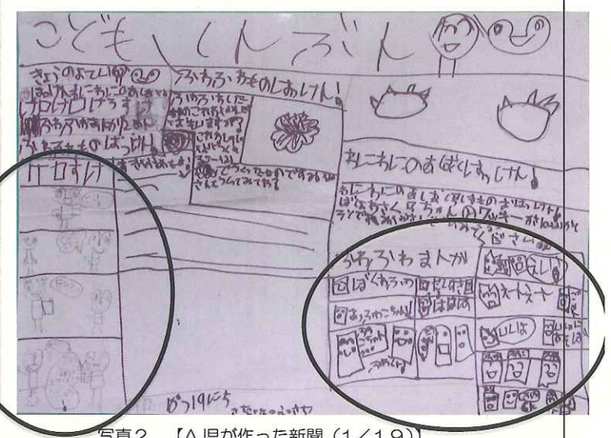


写真２　【A 児が作った新聞（1／19）】

【考察】

◆ A 児にとっての新聞

教師は、A 児が新聞を書いた時は、新聞をコピーして配れるようにしようとは思わなかった。それは、A 児は、教師が書いた『こどもしんぶん』のイメージに沿って新聞をかくことを楽しんでいて、かくことそのものが目的であると読み取ったからである。A 児はカエルが特別好きな幼児であり、教師の『こどもしんぶん』にある「ケロすけ」のマンガにも惹かれたのかもしれない。A 児の新聞にも「ケロすけ」のマンガや、その日の保育のコーナーに出ていた毛糸のボンボン「ふわふわ」についてのマンガもかかれていた。A 児は、集中して新聞をかき、気の合う女児との間で「ケロすけ」や「ふわふわ」などのイメージを共有することで満足感を得ていた。

◆ T 児にとっての新聞

教師は、T 児が新聞を作った後、その新聞をコピーして配れるようにした。それは、T 児は、新聞を書くことを手段として、表現したり情報を伝えたりしたいと思っていると読み取ったからである。T 児はこれまでに、教師やA 児の『こどもしんぶん』や、家庭で購読している『朝日新聞』に触れていた。そこで、新聞というものが、見ることで面白いもの、周囲の人に情報を伝えるものであり役立つものだと何となく感じていた。T 児は、自分の好きな東京タワーが、曲がっていたという事実に対して「大変だ」と言い、興味や関心を示していた。そして、友達に伝えたい、伝える必要があるという思いに動かされて新聞作りをしていた。その頃話題になっていたスカイツリーの情報や、身の回りの遊びのことや、友達の様子なども書いている。新聞のタイトルは、T 児の家で購読していた『朝日新聞』と同じ『あさひしんぶん』にした。

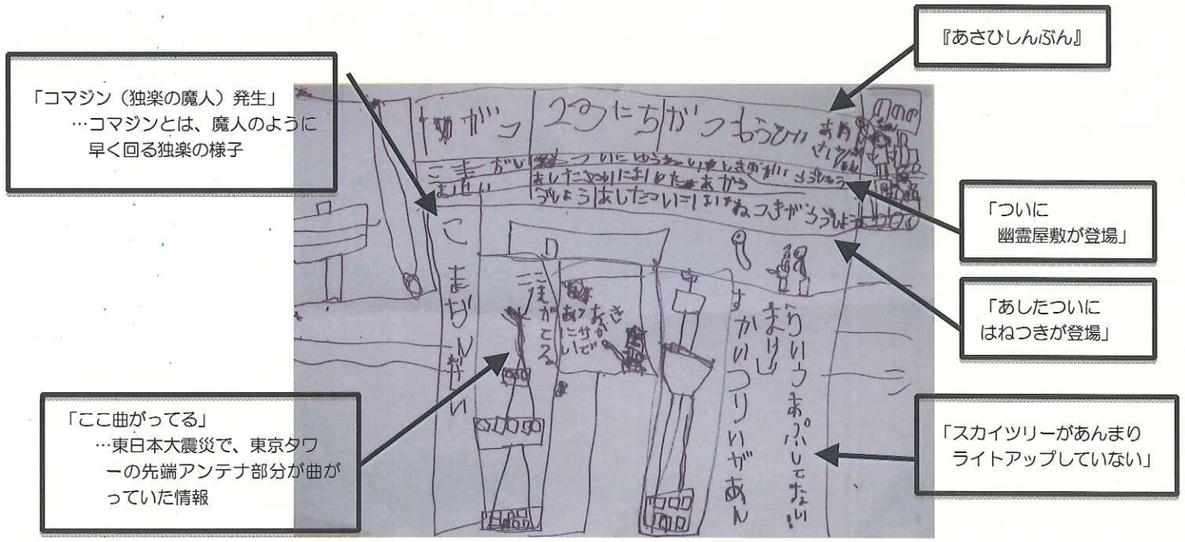


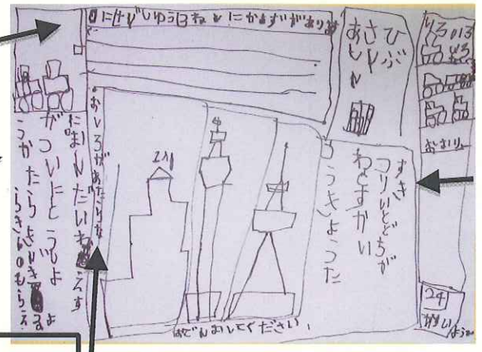
写真３　【T 児が初めて作った新聞（1／23）】

（２）新聞の内容の変化　事例２−①

Ｔ児の新聞作りは、東京タワーが曲がったことへの自分自身の興味や関心、学級の中で行われているコマ回し、幽霊屋敷、羽根つきの話題を表すことで始まった（写真３）。自分の好きな『カーズ』の情報や車の４コマ漫画（写真４）なども表すようになり、自分の興味や関心があること、自分で直接かかわったり見たり聞いたりしてきたことが、表現の中心となっていた。また、事実や実際の情報以外にも、「東京タワーとスカイツリーどっちが好き？」「お城があったらいいなあ」という、自分の中から出てきた思いや質問も表れている（写真４）。

「2013年に『カーズ』があります。」

「日本大レースがついに登場。勝ったらキンキラキンの　もらえるよ。」



「東京タワーとスカイツリーどっちが好き？」

「お城があったらいいな。」

写真４　【２回目に作ったＴ児の新聞（１／２４）】

１月２３日（月）に、Ｔ児が初めて新聞を作ってから、教師はＴ児と一緒に、保育室の一角に新聞局を作った。意欲的に取り組むＴ児の遊びを支えたいという思いからであった。拠りどころとなる場所ができ、遊びに流れができると、「明日につながる」のではないかと考えていた。新聞作り専用のテーブルや、バックナンバーを収納する引き出しを設定し、これまで作った新聞は新聞局後ろの壁面に貼れるようにした（事例３参照）。

Ｔ児は、その場を拠点にして毎日かかさず新聞作りや配達をするようになった。Ａ児は新聞局で新聞作りをすることはなかったが、１月２６日（木）にＳ児が加わり、Ｓ児も新聞作りを続けるようになった。

事例２−②

曲がった東京タワー　取り換え工事始まる

東京都内の観光スポットの一つ、東京タワーの取り換え工事が始まった。曲がったアンテナ設置の作業は、今月末から。来年1月ごろ、新しいアンテナが完成する。工期は約一年。タワーは、東京都港区の芝公園にある。高さ333メートルで、1958年に完成した。現在のアンテナ部分は、鉄骨コンクリート2階建ての展望台の上に、約20メートルの高さで立っている。

アンテナは長さ約二十四メートル、重さ約一トン。足場の設備が曲がったため、アンテナを取り換えることになった。

工事のイメージ図。東京タワーは、下部をのこしての取り換えとなる。

新聞記事Ａ

Ａ　「曲がった東京タワー　取り換え工事始まる」

Ｔ児の新聞作りが始まった週の終わり、１月２７日（金）に、これまでの様子を見ていた副園長が、Ｔ児に新聞記事の切り抜きを渡した。「曲がった東京タワー　取り換え工事始まる」という見出しに、赤ペンで振り仮名をふったものだった。Ｔ児は、その記事で見た情報や、副園長とのやりとりの中で得た情報を、新聞に表していた（写真５）。副園長からもらった記事は、教師が新聞局の壁面に貼っておいた。学級全員分をコピーして、降園時に新聞を配布したこともあり、学級全体でも新聞への興味や、Ｔ児達の遊びへの認識が出てきていた。

Ｂ　「ツリー観察日記」

２月７日（火）から、Ｔ児の新聞のタイトルは『とうきょうたわーしんぶん』になり、２月８日（水）には、『すかいつりーしんぶん』になった。この頃、Ｔ児とよく一緒に遊んでいたＯ児が、家から新聞記事の切り抜きを持ってきて、新聞局のテーブルの上に置いた。スカイツリーの写真が載っている記事の切り抜きだった。教師はその記事を『すかいつりーしんぶん』の隣に貼っておいた。

ツリー観察日記　12・1・5

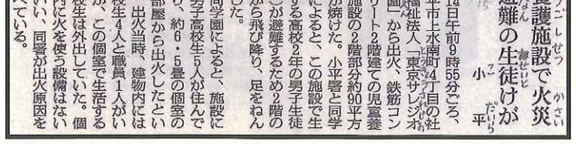
塔高634メートル

午前6時50分頃、太陽が顔を出すと底面の空は白み、ツリーは鮮やかにピンク色に染まった。世武タワースカイツリー社によると、縦1個分（350cm）の日の出は地上より2、3、4分早く訪れる。天候などの条件が同じなら、展望台は350cmで最も早く日の出を拝めた場所。ツリー社は、初日の出を拝めるよう元日早朝に展望台を開けることを検討中。

新聞記事Ｂ

Ｃ　「養護施設で火災　避難の生徒けが」

２月１５日（水）、幼稚園の近くの施設で火災があったことが、朝日新聞に掲載された。Ｔ児や、Ｔ児と一緒に遊ぶことの多いＹ児の家の近くだった。Ｔ児は登園するやいなや「大変だー！！Ｙくんちの近くで火事があったー！！」と叫んでいた。幼稚園でも朝日新聞を購読していたので、教師はすぐに新聞を調べ、その記事を切り抜いた。タイトルに振り仮名をふって、Ｔ児やＳ児、他数名の幼児と一緒に記事を見た。その日のＴ児とＳ児の新聞のトップ記事は、その火災の情報だった（写真６、７）。



養護施設で火災　避難の生徒けが

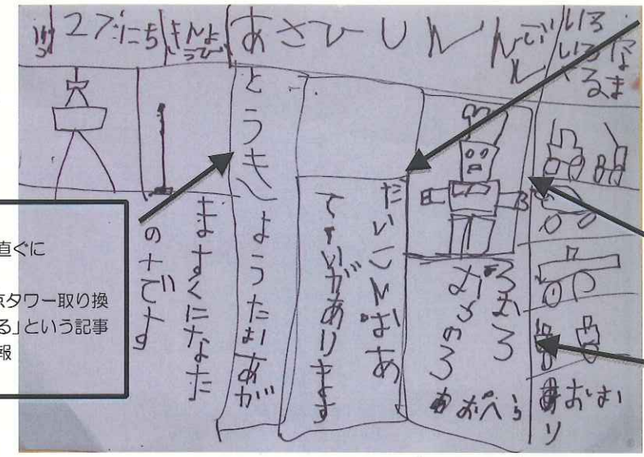
小平市上水南町の社会福祉法人「東京サレジオ学園」から出火、鉄筋コンクリート2階建ての児童養護施設の2階部分約90平方メートルが焼けた。小平警と同学園によると、この施設で生活する高校2年の男子生徒（17）が避難するため2階の窓から飛び降り、足をねんざした。

同学園によると、施設には男子高校生5人が住んでおり、約6・5畳の個室の1部屋から出火したという。出火当時、建物内には高校生4人と職員1人がいたが、この個室で生活する高校生は外出していた。個室内に火を使う設備はないといい、同署が出火原因を調べている。

新聞記事Ｃ

事例２−③

Ａ　「曲がった東京タワー　取り換え工事始まる」



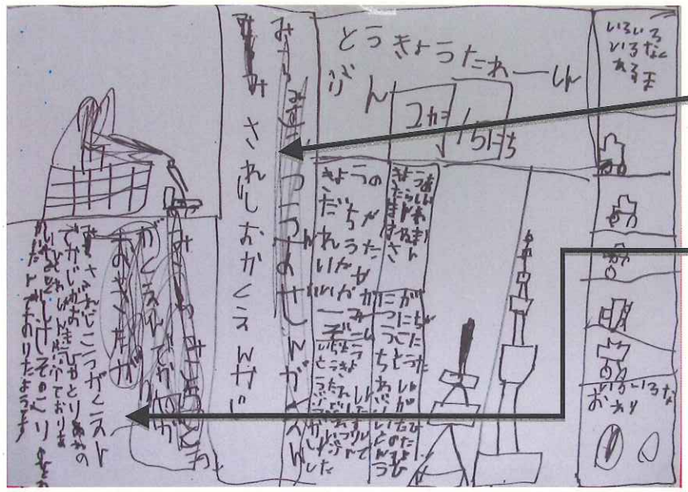
「大根パーティーがあります」
…自分たちで育て収穫した大根を食べるパーティーをしようと、教師が投げかけた行事の情報

「東京タワーが真っ直ぐになったのです」
…「曲がった東京タワー取り換え工事始まる」という記事から得た情報

「『ロはロボットのロ』オペラ」
…学芸大学音楽科の学生による音楽劇のチラシから得た情報

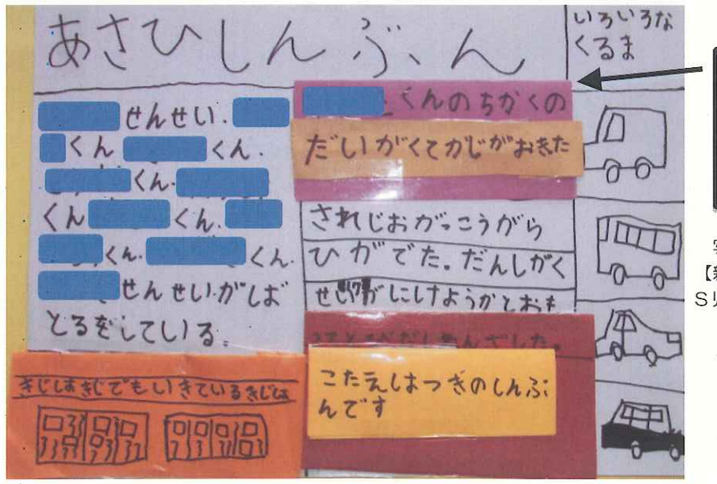
写真５　【新聞記事Ａを見て作ったＴ児の新聞（１／２７）】

Ｃ　「養護施設で火災　避難の生徒けが」



「サレジオ学園火事　サレジオ学園で火事がおき、ひとりのひとがジャンプして足をくじけ、残りの人は階段で降りたようです。」

写真６
【新聞記事Ｃを見て作ったＴ児の新聞（２／１５）】



「Ｙくんの近くの大学で火事が起きた。サレジオ学校から火が出た。男子学生が逃げようかと思って飛び出し捻挫した。」

写真７
【新聞記事Ｃを見て作ったＳ児の新聞（２／１５）】

【考察】

◆ 体験と表現について

T 児の新聞には、T 児の体験や友達の体験が様々に表現されている。そこで、ｉ自分自身の体験や思いの表現　ⅱ他者の体験や情報の表現　の２つの視点から、その表現と内容の変化について考えた。

ｉ自分自身の体験や思いの表現（事例２－①に多い）

T 児の新聞作りは、東京タワーが曲がったことへの自分自身の興味・関心、学級の中で行われているコマ回し、幽霊屋敷、羽根つきの話題を表すことで始まった（写真１）。また、自分の好きな『カーズ』の情報や車の４コマ漫画などが書かれている（写真４）。ここから、自分の興味や関心があること、自分で直接かかわったり見たり聞いたりしてきたことが、表現の中心となっていることがわかる。また、事実や実際の情報以外にも、「東京タワーとスカイツリーどっちが好き？」「お城があったらいいなあ」という、自分の中から出てきた思いや質問も表れている。

ⅱ他者の体験や情報の表現（事例２－②に多い）

「曲がった東京タワー　取り換え工事始まる」という新聞記事により、T 児は初めて、他者から投げかけられた情報を新聞の中に表現した（写真５）。その日の新聞には、前日に教師が幼児全員に配布した、音楽劇のチラシ『ロはロボットのロ』の情報や、教師が投げかけた大根パーティーのことも表してある。他者から投げかけられたものに対して、T 児が興味や関心を抱き、自分の意志で新聞に表している。また、他者の体験に対じて自分の体験のように興味関心をもち、新聞に表す様子も多くなってきた。

◆ 協同性の育ちについて

T 児の新聞の内容は、ｉからⅱへと変化してきている。このような内容の変化は、周囲の幼児との協同性が育っていることが影響しているのではないだろうか。

T 児の表現には、自分が体験したことや興味・関心があることを中心に、自分の思いを発信する内容であったが、次第に見る側を意識した表現が増えてきた。見る側が学級の仲間だからこそ学級の行事（大根パーティー）の情報を載せているし、Y児や、Y児をよく知る幼児が見ているからこそ、Y児の家の近くで起きた火事の情報を載せている。これまで共に幼稚園生活を送ってきた友達が受け止めてくれる、反応してくれることを感じながら取り組み、表現するようになった様子が読み取れる。また、周囲の友達とのつながりを感じているからこそ、友達の体験に対して自分のことのように興味・関心を抱いて表現しているともいえる。

◆ 新聞記事の切り抜きの活用

T 児が記事の切り抜きと出会ったことで、T 児の興味・関心の及ぶ範囲が広がった。ただ単に外発的に記事の切り抜きが投げ込まれたのでなく、友達や教師が T 児の取り組みの流れの中で必要感を感じて記事を渡したことが、豊かな出会いになったと考えられる。T 児は、自分が直接体験していないこと（他者の体験など）であっても、状況や大きさを想像したり自分の体験のように興味・関心をもって知ろうとしたりするようになった。またこの出会いによって、T 児が家庭で触れている朝日新聞と幼稚園での新聞作りのつながりが、より深まった。特に２月１５日（水）の火事の記事では、朝日新聞に自分の身近な場所が取り上げられていたことで、実際の新聞の存在を身近に感じ、新聞のもつ機能について実感をもったのではないかと思われる。

翌日、２月１６日（木）からは、T 児の新聞作りには必ず朝日新聞の切り抜きが活用されるようになった。毎朝、家庭で両親と新聞記事を眺めながら、面白そうな写真や両親の話を手がかりに記事を選び、幼稚園に持ってきて新聞を作ることが続いた。

（３）遊び方の変化　事例３

〈新聞局〉

T 児が新聞を作り始めた翌日、教師は T 児と一緒に新聞局をつくった。はじめは新聞をつくるための専用のテーブルとイスを設置しただけだったが、その後、バックナンバー（余った新聞）を収納する引き出しを設置した。壁面には画用紙にかいた原紙を自分たちで貼り足していけるように示した。１月２６日（木）にＳ児が加わってからは「しんぶんきょく」という看板もでき、学級の幼児にも認識されるようになってきた。“新聞を作る→コピーしてもらう→配る→片付ける”という遊びの流れが出てきて、２月１０日（金）のニュースキャスターごっこをきっかけに、K 児も加わった。２月１６日（木）からは、新聞記事が毎日使われるようになった。

写真８　【新聞局のバックナンバー用引き出し】

ニュースキャスターごっこで使うテレビ画面と天気図

写真９　【新聞局で新聞を作る T 児とＳ児（２／２２）】

〈ニュースごっこ〉

２月１０日（金）の新聞に天気のことをかいたことをきっかけに、T 児が「ニュースもやりたい」と言った。教師は T 児やＳ児と一緒に、段ボールを切り抜いてテレビ画面をつくった。天気図なども用意すると、ニュースごっこが始まった。「新聞局でニュースも見れます」と言って、テレビ画面の前に周囲の幼児を集め、天気の中継をしながら、時々コマーシャルや漫才もしながら遊んでいた。K 児も参加してふざけ合ったり順番を待ってキャスターになったりしていた。その後の K 児の新聞には、天気図や「あつい・さむい」などの言葉がかかれていた。

写真１０　【K児の新聞の一部（２／２４）】

【考察】

◆ 協同性の育ちについて

T 児の新聞作りを新聞局で行うようになると、T 児は新聞局の一員として新聞を作るようになった。新聞局での遊びの流れができて取り組みが活性化されると、S 児やK児も加わり、新聞局のメンバーが増えた。情報を人に伝えるということから、ニュースやテレビ番組の要素も取り入れて遊ぶようにもなった。お互いのこだわりに沿ってそれぞれが新聞を作るだけでなく、友達と一緒に場を共有したり、ニュースキャスターを一緒に演じたり、イメージを共有したりするようになった。

こうして場ができたり遊びに流れができたりすることで、新聞作りに対しても、より意欲的に取り組むようになり、遊びが継続した。友達の影響を受けて互いの新聞の内容に変化が現れるようにもなった。このような遊びの広がりや遊び方の変化によっても、協同性の育ちが支えられていると考えられる。

（４）他児の新聞作り　事例４－①（Ｋ児）

Ｋ児は強いこだわりをもっていて、新幹線や動物作りを、一人で集中して続けることが多かった。年長になり、Ｔ児やＳ児と一緒に過ごすことが増え、２人が新聞を作る様子もよく見ていた。２月１０日（金）のニュースキャスターごっこに仲間入りした後、Ｋ児は「ぼくも新聞作る。」言い、黙々と作り始めた。

初めて作った新聞の内容は、自分が家で作ってきた紙でっぽうの作り方だった（写真１１）。友達に伝えたいという強い意欲からではなく、新聞を作ってみようという気持ちが先にあり、その後で内容をかみでっぽうの作り方に決めていた。その後、壁掛け小物の作り方（２／13）、コップの作り方（２／14）、はなの作り方（２／15）、チュウリップ葉っぱの作り方（２／16）と続いた。教師はその新聞を見ながら、実際に作ってみたり、作ったもので遊んだり使ったりすることで、Ｋ児の情報を受け止め、活用する援助を行った。

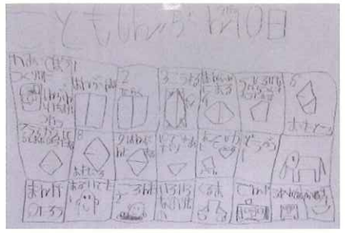


写真１１　【Ｋ児が初めて作った『こどもしんぶん』（２／１０）】

新聞記事Ｄ

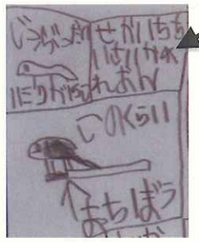


写真１２
【Ｋ児の新聞
一部（２／１７）】

「世界一小さいカメレオンこのくらい　マッチ棒」

２月１７日（金）、Ｔ児が自分の新聞に使おうとカメレオンの記事を持ってきた。Ｋ児は動物が好きだということもあり、しばらくＴ児と一緒に記事を見たり、教師からもらった実際のマッチ棒を使って、大きさを試したりしていた。その後Ｋ児は初めて、折り紙の折り方ではなく新聞記事の情報を、新聞に書いた（写真１２）。

事例４－②（Ｋ児）

２月２４日（金）、Ｋ児は「動物コンテスト」をするということを新聞にかいた。その動物とは、５歳児学年の１学期から、一人で作り続けてきたカラーポリ袋の動物のことである。これまで自分が作った動物の中でほしいものを、早いもの順でもらえるという企画であることがわかった。

写真１３　【動物コンテストの情報を載せた新聞　一部（２／２４）】

「動物コンテスト　うさぎ２名　こうもり１名」
…これまで作った何十匹もの動物が、家に保管されており、その動物を紹介している。

学級の仲間は、Ｋ児がこれまでたくさんの動物を作ってきたことを知っていて、Ｋ児が動物を忠実に作る様子をすごいと思っていた。動物コンテストの新聞が出たときも、周囲の友達は「ぼくはモルモット！」「私はリス！」などと言って受け止め、反応していた。Ｋ児もまた応じて、応募用ポストを作るなどしていた。その頃からＫ児も、Ｔ児やＳ児と同じように、新聞局の場を使い、頭をつき合わせて新聞記事を見るようになった。新聞の中に世の中の情報（東日本大震災やスカイツリーなど）も表れている。

「東日本大震災からまもなく１年」
「福島の原発で　ロボットで何とかすることを考えている」

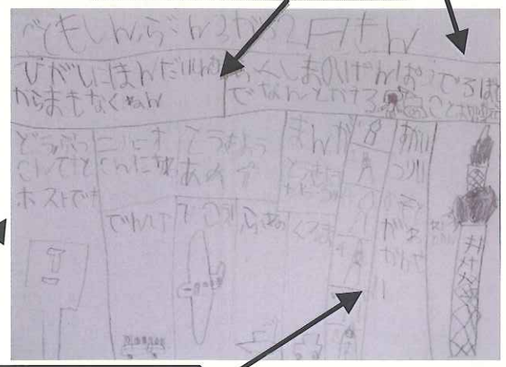


写真１４　【動物コンテストの情報を載せた新聞（３／２】

「動物コンテスト　ポストでも」
…教師の提案で、ポストを設置したり、集合時にもその新聞を取り上げて話をする機会を作ったりした。

「スカイツリーの外側完成」

写真１５　【応募をチェックするＫ児】

写真１６　【Ｋ児が作ってきた動物の一例】

写真１７
【Ｋ児の新聞に
載っていた壁掛け小物】

【考察】

◆　体験と表現について

Ｋ児の新聞には、紙でっぽうの作り方など、自分の知っていることや、自分の体験そのものが中心に表れていた。そこから、友達の存在や他者の体験を意識した内容や、世の中の情報を表すようになっていき、やがて新聞を見る側に働きかけたりやりとりを感じたりしながら取り組むようになっていった。そのような内容の変化には、Ｋ児がＴ児やＳ児のそばで一緒に取り組みながら、他の幼児や環境に積極的にかかわり協同して活動するようになったからだと考えられる。

◆　協同性の育ちについて

ⅰ新聞のもつ意味の実感

Ｔ児やＳ児の姿や新聞を通して、Ｋ児は新聞から情報を得ることを楽しんでいた。また、教師はＫ児の新聞から情報を得て、作ったり使ったりするなどして、Ｋ児が発信した情報を活用した（写真１７）。このような友達の姿や教師の援助により、Ｋ児は新聞を作ることの意味を感じたり、友達を真似てみよう、隣で作ってみようと思ったりするようになった。

ⅱ動物に関する取り組み

Ｋ児のようなこだわりの強い幼児においては、数人で一緒にものを作ったり、同じ動きを楽しんだりするような遊びが行われにくい。しかし、Ｋ児の興味やこだわりが大切にされながら、友達のそばで一緒に遊んだり役割を感じたりする経験が重なっていくことで、互いの取り組みを認め合うような協同的な関係が育っていった。Ｋ児の場合、４歳児学年で入園してから、自分の好きな新幹線や電車作り、動物作りを思い切り取り組んできた。動物に関しては、園外保育で動物園に行ったり学年で動物園ごっこ（動物作り）をしたりと、Ｋ児の興味やこだわりが、学年の仲間や行事の中に自然に位置づく経験もしてきた。今回は、Ｔ児が持ってきたカメレオンの記事や、Ｋ児自身が思いついた動物コンテストを周囲の幼児が認め楽しむことがきっかけで、Ｋ児が協同して活動するようになった。

ⅲ一緒に取り組む友達の存在

Ｋ児は、Ｔ児やＳ児と一緒に新聞局の場で過ごし、ニュースキャスターごっこをして遊んだ。Ｔ児が持って来た新聞記事の切り抜きを、３人で頭をつき合わせて見るようになり、自分を出し合える相手と一緒に、同じ場で、同じ画用紙や同じ記事を使って、新聞を作るようになった。それぞれのこだわりに沿って個の課題を追及しながらも、他者と共に環境にかかわりながら個の内面を変えていった。

ⅳ学級の仲間の存在

学級の仲間は、これまでにＫ児が、どんな思いでどのように動物を作ってきたかを知っている。共に園生活を送る中で、互いのしていることを認め合ってきた仲間だからこそ、Ｋ児の動物コンテストにも興味を示し、様々に反応した。動物コンテストについてＫ児に質問したり思いを伝えたり、直接的には、希望の動物を書いてポストに応募するという動きで答えた。Ｋ児は友達の存在を感じ、友達とのやり取りを新聞を通して感じながら、取り組みの意欲を高めていった。

（5）新聞ごっこの収束　事例５　『さよならしんぶん』

２月後半になり、５歳児学年の生活の場では、園生活が終わりに近づいていることを感じさせる雰囲気が漂うようになった。保育室の黒板には、教師が「修了式まであと〇日」という表示を掲げていた。それぞれの幼児が、自分なりにそのことを感じるようになり、Ｔ児は、あと何回新聞を作れるかということを意識するようになった。そして２月２７日（月）、Ｔ児は「新聞最後に書くなら『さよならしんぶん』」と表した（写真２０）。

また、この頃から、Ｔ児の新聞に対して、「読めない」「字が間違えてる」と言う幼児が出てきた。教師が鉛筆と消しゴムを用意しておくと、Ｔ児は、これまでマーカーを使っていたが、鉛筆でかくようになり、直したい字や表現がある時は消しゴムで消して、かき直すようになった。

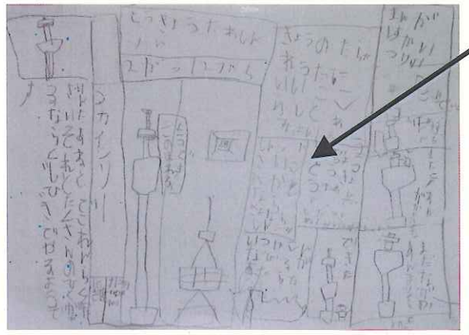


写真２０　【“さよなら”が初めて出た新聞（２／27）】

「新聞最後にかくなら　『さよならしんぶん』」

「『さよならしんぶん』
まであと１０回」

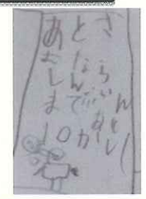


写真２１　【新聞　一部（３／１）】

「『さよならしんぶん』
まであと１回
さびしい」

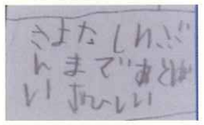


写真２２　【新聞　一部（３／１３）】

３月になると、Ｔ児は、自分の新聞の中にも、「あと『さよならしんぶん』まで〇回」と、示すようになった。Ｔ児が新聞作りを始めてから１ヶ月以上が経ち、Ｔ児以外の幼児は新聞作りをやめたり、Ｔ児自身も飽きてきた様子が見られたりする時期もあった。しかしＴ児は、新聞作りをやめることはなかった。Ｔ児が毎日同じ遊びを持続することはこれまで多くなかったにもかかわらず、「まずは朝、新聞を作るんだ。」「今日は新聞を作ってから、外で遊ぶ。」などと自分で予定を立て、他の遊びも楽しみつつ、新聞を作り続けた。

【考察】

◆　新聞作りのリズムと流れ

新聞局という場があったことで、Ｔ児の取り組みは落ち着いて決まった場で行われ、周囲に認知され認められていった。また、Ｔ児は、新聞記事の切り抜きを毎日持参して新聞作りに使っていた。新聞記事を幼稚園に持って来る→　記事を教師や友達と見る→　新聞を作る→　コピーしてもらう→配る→　片づける。という遊びの流れがあった。新聞を作るときは、はじめに枠線を引き、タイトルをかき、続いて新聞記事に関することからリズムよくかいていった。Ｔ児の中で、新聞作りに対する心地よい遊びの流れやリズムがあり、「今日も作ろう」「また明日も作ろう」という意欲が湧いていた。

◆　協同性の育ちについて

Ｔ児の新聞作りは、周囲の幼児や大人に認められ、期待されていた。「面白い」「役に立つ」という感想を周囲がもち、楽しみにする周囲の雰囲気があった。Ｔ児は自分のペースで取り組みながらも、新聞作りに誇りをもち、役割を感じるようになっていった。Ｔ児の中で一日の流れや見通しができると、計画的に時間を決めたり内容を決めたりしながら新聞をつくるようになった。卒園という、幼稚園生活の最後への見通しができると、卒園まで毎日新聞作りをすることが、自分のめあてとなって位置づいていった。

Ｔ児は、新聞を作ること自体は一人で行っていたが、その背景には、周囲の幼児やそばで同じような取り組みをする友達の存在があった。一見、個の課題を追及している活動に見えても、他者への思いやつながりは深く、園生活や学級集団に位置づく活動であった。

◆　文字や数量について

Ｔ児は、自分が発信した情報を友達に伝えたいという気持ちや、もっと表現したいという意欲から、鉛筆と消しゴムを使うようになった。また、新聞に示された「あと〇かい」の数字が少なくなっていくと共に、幼稚園生活がのこりわずかになっていく寂しさを味わっていた。文字や数量に対して、必要感に基づく体験や、実感の伴う体験を大切にし、もっと伝えたい、表現したいという意欲や興味・関心を、小学校での学習意欲にもつなげていきたいと思う。

事例４－③　（Ｓ児）

２月１０日（金）何枚もの張り紙が、保育室やテラス、事務室などに貼られた。「このしんぶんきょくは　やめようかともおもっています。さみしいですが　おことわりください」（写真１８）。Ｔ児と一緒に新聞局で新聞を作ってきたＳ児が作ったものだった。Ｓ児にとって新聞作り５回目の出来事だった。

張り紙を見た副園長がやってきて、「えー！やめようかとも、思っているんですか！？」と驚き、ショックを受けたような表情で声をかけていた。Ｓ児は、はにかみながら何かを確認するような表情を見せたが、また別のところに行ってしまった。走って貼りに行くＳ児の背中を、Ｔ児は何も言わず見ていた。その日のＴ児の新聞には、（写真１９）のように書いてあった。

しかし、実際にはＳ児は、月曜日に１日休んだだけで、翌日の１４日（火）からは、また作り始めていた。

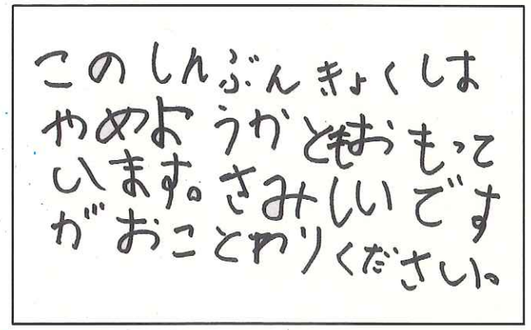


写真１８　【Ｓ児がかいた張り紙（２／１０）】

「Ｓのかいた新聞を
そろそろやめるようです。」

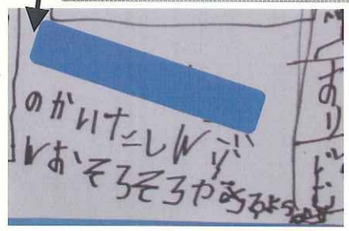


写真１９　【Ｔ児の新聞の一部（２／１０）】

【考察】

◆　貼り紙の意味

Ｓ児は、自分が「やめようかともおもっている」ことを主張しているが、その表し方は、貼り紙という形であり、それは新聞と同じように情報を伝える媒体を利用していることが言える。Ｓ児の行動は、本当に嫌になって黙って遊びから抜けるでもなく、Ｔ児に口頭で断って抜けるでもない。新聞局の一員として情報を配達している姿であり、「新聞ごっこの続き」のようなものであるように見えた。

副園長は、Ｓ児の投げかけに対して、驚く、質問する、がっかりする、という形で応えていた。事務室の職員や園長のところにも紙が届き、情報を受け取った相手が驚いている様子を見て、Ｓ児は、自分の情報が届いていることや自分の取り組みが期待されていることを確認していたようだった。

◆　協同性の育ちについて

Ｔ児は、自分の新聞に表しているように、Ｓ児の「やめようかともおもっている」情報は伝わっていた。ただ、Ｓ児が張り紙を届ける様子が、まるで新聞ごっこの続きのようだったことから、無意識ながら「つまらない」とは感じていなかったのではないのだろうか。Ｔ児は、Ｓ児に対して心を乱したり悲しんだり怒ったりしなかった。自分のしている取り組みや新聞局の存在が、何となく肯定されていると感じていたのではないだろうか。実際の言葉や主張している内容ではなく、見えない、聞こえないところに互いの本当の内面が表れていて、幼児同士でそれを感じ合ったり応じ合ったりしている姿だった。

3　まとめ

（1）幼児の体験と表現

幼児が作った新聞には、様々な幼児の体験が表れていることがわかる。事例２では、Ｔ児の新聞の内容が、「ｉ自分自身の体験や思いの表現」から「ⅱ他者の体験や情報の表現」へと変化した様子が読み取れた。そこには、「他者の体験」を自分の体験のように感じたり想像したり、「他者の情報」に興味や関心を示したりする姿があった。幼児は、環境にかかわりながら様々な体験を重ね、その体験によって表現を深めたり変化させたりしている。教師は、幼児の表現からどのような体験をしているかを読み取り、その体験の背景にある気持ちや心の動きを読みとって次の援助に生かしたいと思う。また、幼児が様々に心を動かしたり、表現したい意欲が湧いたりするような体験に出会えるように援助したいと思う。

（2）協同性の育ち

①一人ひとりの遊びの意味

今回の新聞ごっこでは、一人ひとりにとっての「新聞」というものの捉え方が違っていた。また、「新聞作り」に取り組む中で、楽しんでいることも違っていた。教師が、幼児が遊びの中で何を楽しんでいるのか、どんな経験をしているのかを探ることで、それぞれの遊びの意味が見えてくる。教師がその意味を丁寧に読み取って援助し、実現できるように支えていくことで、幼児の満足感を高め、明日への遊びの持続につなげることができる。

②遊びが継続することで生まれるもの

新聞ごっこが継続する中で、それぞれの幼児にめあてが生まれ、様々な経験をしながらめあてを実現していった。めあてが達成されると、また新しいめあてができ、そこに向かって取り組んでいった。そのような繰り返しの中で、幼児が工夫したり、試してみたりする姿があった。また、遊びが継続することで友達の様子がわかるようになり、真似しようとする姿、気持ちや考えを伝達する姿、一緒に取り組む姿、友達のしたいことを支える姿が見られるようになった。

③新聞ごっこの中で見られた協同性の育ち

本園では、協同性を、「友達のそばにいたり一緒に遊んだりすることを繰り返しながら、次第に共通の目的をもって役割分担をして活動を行っていくこと。他者と共に環境にかかわりながら、個の内面が変化すること。」と捉えている。今回の新聞ごっこでは、Ｔ児、Ｓ児、Ｋ児の作る新聞に、それぞれのこだわりが表れていた。彼らは新聞自体を友達と一緒に作ることはなく、自分のこだわりに誇りをもちながら、自分で自分の新聞を作っていた。そこには個の課題を追及していく姿があり、直接的な共同作業や役割分担が多く見られたわけではなかった。しかし、友達のそばで取り組みを続け、友達と様々な体験を重ねる中で、次第に周囲の幼児に影響を受けたり、学級のつながりを感じたりしながら取り組む活動へと変わっていった。最後にはＴ児が、幼稚園生活が終わるまでを、「あと○かい」と新聞に表し、学級の仲間も「あと○かい」と受け止める日々が続いた。そういった、共感できる感覚や思いのやりとりが確かにあり、そのような協同的なつながりがあってこそ、個の課題が追及できた姿だった。

④家庭との連携

今回の新聞ごっこにおいては、家庭から新聞記事をもって来ることが習慣になり、そのことで遊びに広がりや深まりが出てきた。家庭では新聞記事を見るひと時が大切にされていて、その体験が幼稚園での遊びにもつながっていた。家庭との連携は、幼児の育ちになくてはならないものであるが、保護者と信頼関係を築き連携していくためには、入園当初からの積み重ねが大切になってくる。Ｔ児の家庭においても、入園当初から幼児の姿を伝え合う関係が幼稚園との間にあり、保護者から理解や協力を得ていた。遊びの中でどのように育っているかを伝えていくことを大切にしながら、家庭と連携して遊びを支えることを大切にしてきた。

（3）教師の援助

①環境の構成

（2）の②でも述べたように、教師は遊びの意味を丁寧に読みとることが大切であるが、そのうえで具体的な援助の方策を考え、どのように環境を構成するかが重要になってくる。今回行った主な環境の構成を、人、もの、こと、場所　の視点から整理してみた。様々な視点から環境を構成することができ、幼児の遊びが変化したり、新たなめあてに向かったりするようになることがわかった。

人　教師は、新聞をコピーして配れるようにした。
　→幼児は、作った新聞を配って、他者に情報を届けられるようになった。

もの　教師は、必要に応じて使えるように鉛筆と消しゴムを用意した。
　→幼児は、かき直したい字や表現を、消しゴムと鉛筆でかき直すようになった。

こと　教師は、新聞記事の見出しに振り仮名を振って、記事の情報を示した。
　→幼児は、他者の情報やできごとを新聞に取り入れられるようになった。

場所　教師は、新聞局の場を設定し、作る場所、貼る場所、片付ける場所を明確にした
　→幼児は、拠り所となる場で、落ち着いて遊べるようになった。

②園内の教職員の協同

新聞ごっこは、園内の教職員や他学年などを広く巻き込んで行われていた。新聞という媒体の性質もあり、多くの人に受け止めてもらえることは、遊びを継続する上での意欲につながったであろう。そもそも、学年主任の「こどもしんぶん」の投げかけがあり、副園長が新聞記事を用意したことで新聞作りが習慣的に行われるようになった。幼児が事務室に頼みにいけば職員がコピーをしてくれ、台所、園長室、各学年の保育室に新聞を届ければ喜んで受け止めてもらえた。途中で出会った教職員に新聞の内容について質問してもらったり、情報を活用してもらったり、保育室に掲示したりしてもらっていた。そこには園全体で、時と場を超えて支え合う、教職員の協同があったと言える。

「さよならしんぶん」が発行された日、４歳児学年の幼児が、新聞局のメンバーに手作りの花を持ってきてくれた。“ごくろうさま”という気持ちからであった。このように園全体に支えられたことによって、幼児は、いっそうの充実感や達成間を味わうことができた。

写真２３　【年中児から花をもらった、Ｔ児とＳ児】

4　おわりに

今回の事例は、私自身が幼稚園教諭を経験して、まだ２年目の３学期の出来事だった。このような子ども達の育ちと共に２年間を送ることができたことを、嬉しく思っている。また、「新聞」という目に見えて残っているものを手がかりにして振り返ることで、子ども達との時間を振り返ることができた。新聞からは、その時気付かなかった発見がたくさんあり、あの子はそんな風に思っていたのか、もしあの時気付いていたらこんな援助もできていたかもしれない、などと、考えをめぐらせることができた。

振り返った中で実感したことは、子どもの表現の背景には必ず体験があり、その体験には、集団生活の中で起こる様々な心の動きや表現したい気持ちがあるということだ。教師は、環境の構成によってその気持ちを支えることができるということもわかった。そして何よりも、担任である私自身以外に、多くの教職員や家庭の援助が、環境を構成していたということだった。

本園は、事務室と保健室が同じ室内に設置されている。事務室のコピー機のところに、Ｔ児が、「コピーして下さい」とやってきたとき、養護教諭は「あなたは何者ですか？」と訪ねた。Ｔ児は、「新聞屋さんです」と答えたそうだ。“さよならしんぶん”という言葉が出て来た頃、養護教諭がＴ児に、また訪ねた。「あなたは何者ですか？」　Ｔ児は今度は、「新聞記者です」と答えたそうだ。養護教諭からその話を聞き、私たちは「Ｔ児くんの中で、やっぱり何かが変わっていたんですね～。」と話をした。

本園には、子ども達の取り組みや担任の援助や思いなどに対して、教職員や家庭の理解があり、日常的に情報交換できる雰囲気もある。例えば子どもが発する言葉のささいな変化も記憶に留め、共有したり共感したりしてくれる人間関係がある。振り返ると、特別な打ち合わせではなくとも、ささいなことから様々なことを感じてくれる周囲の人から援助を受け、別の時、別の場で、別の大人がしているさりげない援助がつながっていたことがたくさんある。また、周囲の大人がかもし出す温かい雰囲気の中で、私自身が無自覚的に環境を構成していたことも、少なくない。私が幼稚園教諭を経験した２年間は、まさに教職員や家庭との協同の中で、私自身が成長させてもらえた２年間でもあった。私自身が、周囲の人に時と場所を超えて支えて頂き、周囲の人とつながる幸せを感じさせてもらえたことに感謝している。

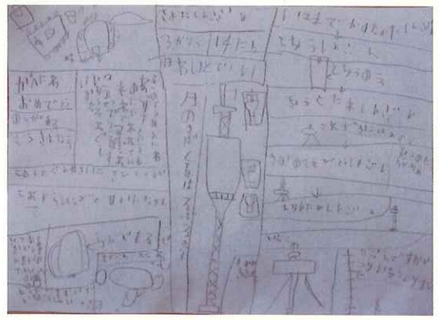


写真２４　【Ｔ児が作った『さよならしんぶん（3／14）】